

# 特殊作戦群と武士道

初代群長ロングインタビュー

## 第二部 世界の戦闘者に通ずる武士道

●荒谷 卓（明治神宮武道場「至誠館」館長／元陸上自衛隊特殊作戦群初代群長）

●企画・撮影：野口卓也

### 【リード】

秘密のベールに隠されている、陸上自衛隊の特殊部隊「特殊作戦群」。その初代群長が我々の前に発足秘話や心得などを語ってくれた。

### 【プロフィール】

荒谷 卓（あらか たかし）

昭和34年、秋田県生まれ。東京理科大学を卒業後、昭和57年陸上自衛隊に入隊。福岡第19普通科連隊、調査学校、第一空挺団、弘前第39普通科連隊勤務後、ドイツ連邦指揮大学留学（平成7～9年）。陸幕防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室勤務を経て、米国特殊作戦学校留学（平成14～15年）。帰国後、編成準備隊長を経て特殊作戦群初代群長となる。平成20年に1等陸佐で退官。平成21年、明治神宮武道場「至誠館」館長に就任し、現在に至る。鹿島神流、合気道6段。

### 【本文】

#### 武士道を求めて、東西南北右左

荒谷さんの武道や至誠館との出会いは、どのような事がきっかけだったのでしょか。

小学生のころから、相撲や柔道をやっていたから、もともと武道には興味がありました。本格的にやりだしたのは、東京理科大学に進学して空手部（松涛館）に入部してからです。その後、理科大野田キャンパスの近くにあった、極真空手流山道場に入門しました。当時は、現在の松井館長も流山道場において、フルコンタクトの殴り合いはかなり気に入っていましたが、そこからは“なぜ戦うのか”といった、戦う目的を見出すことはできませんでした。

大学に入った頃は成田・三里塚闘争が続いていて、農家の土地を国が取り上げ、成田に空港を強引に造るというやり方に反対だったのですが、指導的立場と自称する極左学生の、農民のためにという偽善と、マルキシズムを無評価に信奉し、日本の歴史を顧みずにイデオロギーを振り回すだけの姿に怒りを覚えるようになりました。その後、三島由紀夫研究会や陽明学研究会を発足し、こちらの会のポスターを彼らのポスターの上に貼るなどして、学内で極左学生と

の対立が深まっていったのです。そんな時、大学の助教授だった方に、“お前に相応しい良い所があるから、連れて行ってやる”と紹介されたのが、至誠館でした。至誠館では、“なんのために戦うのか”ということや“どのような戦いをするのか”といった、私が探っていた答えを見つけることができるという直感を得たのです。

**荒谷さんは、長い時間にわたって武道を習得されてきたわけですが、武道や武士道は、自衛隊の中でも活かされているのでしょうか。**

日本の武道書は、戦うということを格闘マニュアルのような技術教本的内容ではなく、“味方の兵士の心をどう扱うのか”、“敵兵の心をどう読むのか”“第三者の住民、中立的な武将とはどう付き合うのか”というように、戦いを戦略的に広範囲で捉えています。戦闘者に必要な能力についても、肉体的な戦闘力のみならず、武器の管理のしかたや戦闘者としての生活様式、精神的な戦闘力、戦いの原理や倫理など広範に教えてくれます。自然の原理の応用では、宮本武蔵が言ったように“太陽を背にして戦う”とか、現代風に言えば“スナイパーはターゲットに風下から接近する”といったごく簡単なことから奥の深いことまで書かれています。日本の武道書が書いている内容は、時代を超えて、現代の戦いにもピッタリと当てはまるのです。

しかし、陸上自衛隊で訓練している戦闘では、末端の兵士は命令どおりに動くだけの一つの機能でしかありません。兵士は、撃て、止め、伏せといった命令に従って動けば良いわけで、そこには武士道は存在しません。自衛隊の訓練の多くが、人間の戦闘力を唯物的に捕まえ、基準どおりに動くことをよしとして、基準を超える兵士の能力を阻害し、さらに精神戦力を無視しているため、実際の戦闘では戦力にならないかもしれません。

### 勝つための心得とは

**先ほど荒谷さんから、ナイフ・ファイトや組み手などを拝見させていただきましたが、あれはオリジナルなのですね。**

まずは、なんでも基本が大事。突き詰めていくと、シンプルな基本に戻ることがわかってきます。

その上で、自分で戦いを体験し、それを消化して、新たな技を作っていくようにしなくてはいけません。誰かの“真似”では、実際の戦いでは勝てません。戦いに勝った側の軍隊の組織、武器、戦法は、世界中に広まるものです。こういう武器であの国が勝ったとか、こういう戦法であの部隊が勝ったという情報は、即時に共有されるので、その後に同じことをやったのでは、もう勝てない。

格闘技などで、先生から習う時は真似でもいいのですが、その後、習った技を自分で消化して、自分が使いこなすための工夫をプラス・アルファの要素を加えて活かさないといけません。

私は、自衛隊に入隊して初めて銃剣道をやりました。最初に赴任した福岡の第19普通科連隊は、全日本銃剣道大会で四連覇中の実力のある部隊でした。当時の連隊には、昔のサムライを感じさせるような人たちがたくさんいて、私のように少々武道をやったという程度ではとても歯が立ちませんでした。第19普通科連隊が連覇を達成していたのは、部隊全体として常にスキルアップがなされていたためでしょう。部隊全体のスキルアップというのは、実際には、個々の隊員の工夫の積み重ねなのです。全日本レベルの達人を追い越していくためには、同じことをしては、取り残されますからね。

実戦的武道がある程度まで身につけてくると、戦いの勘所が身につくので、銃剣道の達人は

戦闘訓練もまたすばらしいものでした。

そうした気風の第19普通科連隊で鍛えられ、自分でも工夫を重ねたこともあり、弘前の第39普通科連隊に中隊長として赴任した時には、中隊の大將として銃剣道大会に出場して優勝できました。

銃剣道の訓練で「この動きの中にある理合いは使えそうだな」と思ったら、それをアレンジして刀でも、射撃でも、ナイフ・ファイトでも試してみて、自分のものにしていくのです。山岡鉄舟は、商人の体験談や大工のかんなのかけ方から剣の奥義を見出したといいますが、戦いの感性のいい人は、あらゆるものからヒントを得ることができるのですね。

逆に、感性の悪い奴ほど、本屋で売っているマニュアル本のような実際には役にも立たないものからしか学べない。幼児が手取り足取りしてよちよち歩きするのと同じです。

戦いは勝たなければならないので、刀やナイフ、銃等武器の種類に固執する必要はなく、それぞれのトレーニングで習得した技術を組み合わせ、整理していくことで、それが創造的な戦術や戦技になるのです。アメリカには射撃が上手な人がたくさんいます。彼らと同じ技術や戦術理論の中で射撃トレーニングをしても、彼らに勝つことはできないでしょう。しかし、彼らの知らない刀の理合いを戦闘にアレンジして使えば、彼らとの戦いに勝つ可能性が出てきます。そういう発想で、自分の戦い方を詰めていくのです。

#### “武士道”という考え方は、海外でも評価が高いのでしょうか？

武士道は良い意味でも悪い意味でも、世界の戦闘者は興味があるようです。特に、“入り身”という技とその“捨て身”という精神は、強烈な印象を与えるようです。そのような考え方は、海外にはほとんど無いからです。

欧米人から、「最近のイスラム自爆テロは武士道か」と聞かれます。彼らには、あのような自分を犠牲にするという発想がありませんから、“あの発想はどこから来たのか。あれは日本の神風、特攻の発想だろう”と思うようです。そこで「イスラムの自爆テロは、自爆テロをやることで死後の世界で報われるという考えを、宗教指導者からインプットされて実行している。彼らは今の人生に希望が持てなくなり、死後に救われたいという精神でやっている。しかし日本の武士道は、生きざまとして、自分自身の生き方を貫く。その延長上に死が存在しても、妥協せず心を通すもので、死後に希望を持つわけではない。己の生き方を、主体的に体現しているのである」と答えています。

その答えを彼らがどの程度理解しているかわかりませんが、海外で、そういう考え方に関心が高まっているというのは確かです。残念なことは、戦後の日本人は、自分の肉体が一番大事だと思う輩が多いので、自分のまごころを大事にするという価値観に感心すら示さないという点では、欧米人より悪いかもしれませんね。

米国特殊作戦学校に留学中、オフィスで“武士道”という文字を見かけたことがあります。米軍には、自己犠牲という道徳・文化はありません。それはアメリカの憲法精神「神から与えられた生命と安全と幸福を追求する権利」に反してしまいますからね。だから、その自己犠牲を一般部隊での教育で奨励はしていないでしょう。ただ特殊部隊は、少数で行動するのでそこを踏まえないと、任務を完遂できないことがある。映画『ブラックホーク・ダウン』でも描かれた、1993年10月のソマリア作戦で行われた墜落したヘリの救出作戦は、デルタフォースからできたのです。

自己犠牲というと、数年前に玄倉川水難事故（1999年8月14日）で、孤立したキャンパーを派遣

された中隊長が自ら助けに行き、なぜ部下を使わなかったのか、なぜ指揮官が出て行ったのかと、大変怒られたと聞きました。

その中隊長は、その後、特殊作戦群に所属しました。中隊長が自ら出て行ったのは、正しい判断です。偶然遭遇したそのような状況で、危険な救出を部下に命ずるのは正当な命令とは言えず、むしろ無責任な職権の行使になります。

指揮官が部下に行動を命じていいのは、行動命令など正当な命令権がある時だけです。例えば、通常の訓練で、指揮官に「もっとスピードを出せ」といわれて、速度違反をすれば、捕まって罰金を払い行政処分を受けるのは車を運転していた部下ですからね。

このような状況の場合、危険を冒して救助を行うのだったら、個人の判断で行うしかないのです。部下に指示して、それで部下が亡くなったら、その指揮官は責任の取りようがないですからね。

だから、この中隊長は、自己の正義感と自己の責任において、自ら救出行動を取った立派な人間といえます。

### 日本の伝統文化の中にある“守るもの”

現在の、そして今後の日本に、“守るもの”とはどのようなものでしょうか。その守るものの中で、**武道や武士道**はどんな役割があるのでしょうか。

自衛官に「具体的には何を守るのか？」と聞くと、通常、明確な答えをいえる隊員はいません。自分で考えることをしない者は「平和と独立を守る」という自衛隊法（サービスの宣誓）を復唱するか、学校で習った「国を守るとは領土、国民、主権をまもることだ」といいます。

前にも言ったとおり、戦後日本政府は、米国の安全保障と経済支援とを得るために自衛隊を創設しました。

前米国防副次官リチャード・ローレス氏がオバマ大統領に提出したレポートについてのインタビュー記事（『見せかけの同盟はもう維持できない』中央公論2010・1月号）で「自国を防衛しなければならない国がそれを避けようとするのは不可解なことだ。世界でこのような不思議な態度をとる国は日本をおいて他にない」「日本は真剣に自国の防衛に指導的役割を演ずる覚悟でないといけない。しかし、（無責任な米国依存）それが今の日本の状態だ。今のままでいることはできない」といっているように、戦後の日本は、自国の平和と独立を完全に米国に依存してきたのであって、自分の努力で勝ち取ってきたわけではないのです。

北方領土、竹島、拉致問題などを考えれば、今の日本が領土も守っていないし国民も守っていないのは紛れもない事実です。

“主権”とは、国際社会の中で、国家に与えられた権限であって、その権限を行使するかどうかはそれぞれの国家の意思です。領土や国民が侵害されても主権を行使する意志がない日本は、自ら主権を放棄しているのです。

だから、戦後の日本は、“平和と独立”、“国民”“領土”“主権”を一貫して守っていないともいえるわけです。

しかし、“平和と独立”、“国民”“領土”“主権”というのは、それを守る主体が日本人でなく外人でも構わない概念です。私は、そんな概念の国を守ろうとは思いません。

日本は、民族の神話を今でも伝える伝統文化を持つ国家ですから、その伝統文化の中にこそ日本のアイデンティティがあると思います。それを維持するからこそ、日本という名称を持つ

国家、日本人という民族としての存在意義があると思います。歴史・伝統を放棄したら、日本や日本人という固有名詞を使う必要はないでしょう。

アイデンティティというのは、自らが本来備えているものを言うのであって、他から持ち込んだものではありません。自分らしさの本質は生まれたときから持ち合わせているものの中にあるのです。民族の神話を捨て、先祖との関係を断ち切って、他の国で創作された理屈に日本のアイデンティティなどあるわけがない。

私の場合、日本の伝統文化の中で、大切なものと言えるものに“武道”があげられます。武道は、日本の戦闘者が二千年以上にわたり蓄積してきた総体系です。戦闘精神、戦略、戦術、戦法、そして天皇に対する忠誠というものを、現在の戦闘者である戦闘者が引き継ぐということは、自分たちが“日本を守っている”と自負して良いと思っています。これは人からとやかく言われるものではないでしょう。

### 精神をバランスよく持つことが必要

この至誠館にも、OBや現職の自衛官が来られていると思いますが、どんな思いを持って来られているのでしょうか。

至誠館には、日本人も外人も物理的な戦闘技術というよりは、精神的なもの、最近の日本では見かけにくくなった大和魂のようなものを求めて稽古に来ている方が多いですね。私自身もそうでした。

自衛官の中には、真面目にこの国のために命を尽くしたいという人がたくさんいるのですが、その精神的なものを満たすものが自衛隊には欠けています。そういうことを話してくれる上司・指揮官がいればいいんですが、とても少ない。「上級部隊がこう言っているから」とか、「規則でこうなっているから」なんて言ってる幹部ばかりだと、戦闘者としての気力がなくなってしまいます。だから、至誠館には、精神的充実を得るために来ているように思います。

先ほどの精神論は、海外でも通るものでしょうか。

もちろんです。つまりバランスの問題なのです。戦前が極端な精神主義だったということで、戦後の自衛隊は、取って返して非精神主義になってしまったのです。どちらもバランスが悪いですね。どこの国でも、精神と身体、戦技・戦術をバランスよくトレーニングします。特に、愛国心の高揚は必ずやりますから、それをトレーニングしないというのは考えられません。自衛隊はあまりにも、精神がドライになってしまいました。

また、戦前の精神主義はもっぱら非難されるばかりですが、パラオでも硫黄島でも、弾も武器も少なかった日本軍が、米軍に日本軍以上の犠牲と損耗を出させた戦力は精神力でしょう。今の自衛隊が、米軍と戦って同じことができますか。必要なのは、帝国陸軍の精神力の上に必要な物理的戦力を備えることです。

自衛隊での最後の仕事は、サービスをテーマにしていたので、世界中の軍隊の服務指導のようなものを取り寄せてみました。自衛隊の服務の宣誓には、“忠誠(Loyalty/ロイヤルティ)”という言葉が出てきません。ほとんどの国には「軍人は忠誠を尽くす」と明記しています。連合王国(英国)だと『女王陛下に対する忠誠』としっかり書いてあります。オーストラリアSOCOM司令官室には、エリザベス女王の大きな写真が額に入れて掲げてありました。忠誠を要求されない軍人は、世界でも珍しいですね。

戦闘者は、自分の中に核心を作ることが必要である

この道場に通ってくる方、特に自衛官の方々に、荒谷館長はどのような事を教えているのでしょうか。

戦闘者でありたいと思うものは、戦闘のような生死の問題に直面しても、ぐらつかない心身の中核を備えておかななくてはけません。

その中核を稽古を通じて、自分の中で作り上げるようにと教えています。

神道では禊（みそぎ）というものをやります。日本の武人は、毎日やっていたものです。

禊を何故やるのかというと、身体の欲望を削ぎ落とし、自分の真心を磨きだし、その真心の思うところに生きる・戦うためです。金や地位等余計なものを削り取って、身が削がれるほどの状態で、自分の真心に何回問いただしても、絶対にこれは正しいとおもえるものを見つけ出す。

他人に反対されようと、自分が何回考えても正しいと思ったら、それは正しいのです。学校で習ったことが正しいのではなく、法律が正しいのではなく、自分が心のそこから正しいと思えるものが正しいのです。それで自信を持ったら、そのために戦えばいい。どんな敵だろうと一切妥協せずに、たとえ体が刻まれようとも命が尽きるまで、心が負けないように自分を鍛えていくのです。

俳優メル・ギブソンが、スコットランドの英雄ウィリアム・ウォレスを演じた『ブレイブハート』という、イングランドに対するスコットランドのレジスタンスを描いた映画があります。ウォレスは最後にイングランド王に捕まって内蔵を引きずり出されるような処刑が行われるのですが、その処刑で、イングランド王が期待していたのは、ウォレスが最後に一言「勘弁してくれ」と発することでした。しかしウォレスは、イングランドに対して戦ってきた精神を揺るがさず、謝罪や妥協をしないで死んでいくという内容の映画です。そのようなイメージで、精神訓練をやっていくと、成果は全然違ってきます。

特殊作戦群でも、人質救出訓練では、相手が完全に銃を構えている所へ突入します。理論的には間違いなく殺られてしまうわけですが、それでも突入して行く。特に、トップガンは、敵の銃弾を全部引き付けるように突入していく。何故入って行くのかというと、「人質を助ける」という使命感・精神力があるからです。生き死に係わる全ての結果を受け入れ、それでも入って行く。実際の殺し合いでは、その精神の強さをもって突入していけば、そこまで決死の精神を持ってない相手は、突入する者の勢いに飲まれてしまうのです。そこが、殺し合いの場に働く、精神力という力です。そこまで詰めている戦士はタダモノではないのです。

### 入り身の技と捨て身の精神が勝利に通ずる

ペルー大使公邸占拠事件で、突入予定の神奈川県警のSAT隊長さんに合う機会がありました。彼は「自分は死ぬかもしれないが、ピストルを持って一番初めに突入する気だった。でないと、部下が付いてこなかったでしょう」と言っていました。

そういう人は、任務を通して精神を練っていくものです。任務を通じて心身を作り上げたところに、本当の戦闘者や兵士ができあがっていくわけです。

そのときSAT隊長は、突入を真剣に考えていたのだと思いますから、実際に突入しなかったとしても、命がけの行動を決意したことで相当の実力が身についたと思います。

個人が戦力単位の武道の場合は、最初に突入するトップガンの役割も、その後攻撃をする2

番以降の役割も、さらにその後の敵の対応を警戒し封じるフォロアーの役割も全部を一人でやることになります。剣では、自分の身を餌に相手の間合いに入って、切らせに行きます。そのきっかけを自分で作れるかどうかは分かれ目で、相手が切ってくるのを待っているようではダメです。相手が動いてからではなく、自ら入身して、相手に切らせる場所とタイミングを自分で作り出すのです。それで相手の攻撃オプションを一つに限定させ、そこに攻撃を加える。相手が“やった、これでコイツを切れる”と思うまで自分を追い詰める、それが“入り身”という技と“捨て身”という精神で、日本の武道で一番大切なところですよ。

CQB (Close Quarters Battle : 近接戦闘) で言えば、自分を餌に入り身するのがトップガンの仕事になります。敵に“よし、こいつを殺す”と思わせないといけないのです。そうすると相手のオプションは限定されます。そこを二番手が制圧して、三番手が続きます。

人数が多いと、細かく役割分担することになり、個人のパフォーマンスは限定したものでいいわけですが、人数が少なくなればなるほど一人一人に期待される判断力と身体能力は、相当高度なものになってきます。しかし、それは、敵の弾を受けても突入できる精神がなくては到底できないのです。

**それは世界的に共通するものなのですか。**

万国共通です。ここだけは武器の性能や種類に関わらず、殺し合いをする人間の心理の世界ですから変わりません。お互いに殺せる間合いでの戦いですから、当然精神の緊張が発生するわけですよ。結局精神がタフなほうが勝つでしょう。

本物のCQBオペレーターは、敵から撃たれることなど気にならず、敵を殺すためドッシリと構えて、ズンズンと敵に近づいていくものです。

なるほど、すごい話ですね。わかりました。本日は貴重な御時間を、長い間ありがとうございました。荒谷館長の今後の活躍をお祈りいたします (聞き手：浅香昌宏)。